

Where there is no Vision, the people perish

北九州信徒聖書学校

2014年3月

第122号

月刊

על-פלי מים

流れのほとり

連絡先 〒807-8691 北九州市八幡南郵便局私書箱 26 号 本部 TEL&FAX 093(692)8592
所在地 〒802-0004 北九州市小倉北区鍛冶町 2-3-13 北九州市 YMCA 内
HP <http://bible-school.name/> E-Mail hope_to_tomorrow.y@san.bbq.jp

天の窓を開く

理事長 山口 晶久

「助けて一、あまりの辛さに車の中で叫ぶんです。」と、友人が話してくれました。仕事のことか、家庭の問題か、その内容は分からない。私たちの社会は、神の存在を認めない物質中心、人間中心の社会です。そこで、私も含め苦悩の日々を過ごします。精神も肉体も疲れ果て、自分自身の存在さえ意味のないように思えるような出来事の中で生きています。

1922 年。北海道旭川生まれ、13 年間療養生活をして、洗礼を受け「氷点」「愛の鬼才」などの本を書いた作家三浦綾子さんは、著書新約聖書入門で、「世には、聖書には全く無関心で一生を終わる人も少なくない。だが、どんな人であったとしても、一生に一度や二度、呻くような悲しみや苦しみに遭うことがあるのではないか。もし、そうした時に、聖書を知っていたならば、その苦しみや悲しみは単なる苦しみや悲しみに終わらず、もっと別の意味を持つかも知れない。」と、言っています。辛くて辛く

て感謝することがほど遠い日々です。しかし、聖書は「キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして・・・信仰をしっかりと守って溢れるばかりに感謝しなさい」と。なぜなら、「主イエス・・・キリストを受け入れたのですから」とは、パウロの言葉です。

戦時中、岡山県知事をした安積得也という人がいました。戦後は、文部省社会教育委員や国民生活審議会の委員を勤めました。この人が明日という詩を詠みました。

「あきだめに えんどう豆咲き
泥沼から蓮の花育つ。

人皆美しい種あり。明日は何が咲くか」

どんなに惨めのように思われても貴いものを人は持っているというのです。この安積さんは、私たちは3つの窓を持っていると書いています。1つは、自分を見つめ反省する。すなわち自分と対話する心の窓である「底の窓」。もう2つ目は、家族・隣人・仲間・友人と、進んで拓がる、分かち合い合う、社会と対話する心の窓である「横の窓」。そして3つ目は、人間を超える大いなる存在と対話する心の窓である「天の窓」

があると。静かに日々の生活を考えてみます。社会と対話する横の窓を大きく開くことが何と多いことか。たまに自分を見つめ反省する底の窓も開く。しかし、「天の窓」を開けることはごく稀です。聖書には、人間を超える大いなる存在と対話した人が紹介されています。

旧約聖書の時代です。エフライム山地、エルサレムから余り遠くない町での話です。エルカナという人がいました。彼には2人の妻がいて、一人はペニンナ、もう一人はハンナです。当時は、二人の妻を持つことは普通であったようです。ペニンナには子どもがいましたが、ハンナにはいませんでした。聖書は、子供がいないハンナをペニンナが「思い悩ませ苦しめた」（サムエル記1章6節）と書いています。たぶん、子どもがいなことで意地悪をしたか何かでしょう。とにかく苦しめました。

ある時、夫エルカナは、この二人の妻と子どもたちを連れ、神殿で犠牲を捧げ礼拝するために出かけます。神殿で、「ハンナは悩み嘆いて主に激しく泣いた」とあります。日頃の苦しみ嘆きが一度に溢れ出たのでしょう。そこで、ハンナは「万軍の主よ、はしための苦しみをご覧下さい。・・・御心を留めて、男の子をお授け下さるなら、主にお捧げします」と誓います。ハンナの唇だけ動かす声のない長い祈りを、神殿の祭司エリが気づきます。エリはハンナが酒に酔っていると思いますが、「深い悩みを持つ女です。酒に酔っているではありません」、「主のみ前に心から願を注ぎだしていたのです」、「どうか、私を悪い女と思わないで下さい。今まで祈っていたのは訴えたいこと、苦しいが多くあるからです」と答えました。祭司エリは、このまじめなハンナの姿を見て「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえて下さ

るように」と励まします。その後、ハンナは身ごもり男の子を産みます。ご存知のように預言者サムエルの誕生です。

このような個所を読みますと、安積さんが語る、天の窓を開き主なる神様と対話する心を養わなければと思わされます。私たちが努めて、聖書の言葉を読み、その語りかけを聴くということ以外には、対話することはあり得ません。聖書が一貫して教えることは、神と人間の歴史における出会いと主イエス・キリストによる救いの成就です。私どもは聖書学校で学んでいます。学校という空間にあえて自分の身を浸し、聖書の言葉を真摯に聴くのです。

1926年。大正15年に内村鑑三が信濃浅間山麓の山荘で書いた、「一日一生」という本の序文に、このような言葉があります。

「一日は貴い一日である。これを空費してはならない。そして有効に、これを使用する道は神の言葉を聴いて、これを始めるにある。一日に成敗は心持ちいかんによって定まる。朝起きて第一神の言葉を読みて神に祈る。かくなしてはじめし日の戦いは勝利ならざるをえない。・・・かかる生涯を終生継続して、一生は成功をもって終わるのである」。新約聖書に「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべての事に（どんな事にも）感謝しなさい」（第1テサロニケ5章15節）とありますが、いつも喜べない自分がいて、祈れない私がいる。現状をみるととても感謝できない。だからこそ、顔を上げ天を仰ぐ。天の窓を開くことに心を用いるのです。そのような日々でありたいと思います。

（2013年11月29日礼拝奨励要約）

神のあわれみとしての礼拝

校長 野村 幸生

卒業おめでとうございます。どの人にも、人生の中で、その人ならではの、神様の特別なお取り計らいというものがあります。そのことに気づかされ、この私への神様の特別な深い憐みを感じて、私たちは、心から神様に感謝と賛美をと捧げて、主にみ名をほめたたえる者となり、もっともっと信仰生活に励みたいと思うようになるのではないのでしょうか。

教会における「礼拝」は、あくまで、この私への神の深い憐みに応えであって、決して、義務でも、戒めでも、教会で何らかの係や役職だからということでもありません。こんな罪人の私を憐れんで、かけがえないひとり子イエス・キリストをお与えになるほどに、この私を愛して下さったお方、それに加えて、つねにおりにかなった助けをして下さるお方である神様に、「礼拝」を捧げてまいりましょう。

卒業という形で、本校での学びに一応の区切りをつけられたことと思いますが、教会における「礼拝」には、さらに一層お励み下さいますように。「そういうわけですから、兄弟たち、私は、神の憐みのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物として捧げなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」（新改訳ローマ 12 章 1 節）

（香住ヶ丘キリスト教会牧師）

幸せに満ちた時

高瀬 紀子

主の恵みに包まれて 2 年間の学びに預かり、たくさんの恩恵をいただきましたことに心より感謝いたします。素晴らしい教授陣の先生方に囲まれて、旧約、新約聖書を一年続けて丁寧に教えていただき、祈りの

内にみ言葉を生きること、証しをもって伝えて下さいました。本当にこれからの信仰生活の基となる、幸せに満ちた貴重な学びの時間でした。

昨年からは、腰を患い DVD での学びでしたが、先生方、兄姉の温かいお声かけや数々のお支えで学びができました。ありがとうございました。洗礼から年月は経ていました。恥ずかしいことではありますが、聖書の知識についてはほとんど何も知らずにおりました。そのような中、北九州地域で関わっています「キリスト者九条の会」で、超教派による兄姉、牧師先生の生き方に接し、きちんと聖書を学び用いられて生きたいとの望みを抱くようになりました。

振り返れば、学校に通う中でこの 2 年間は聖書学校に支えられての信仰生活だったように思えます。カトリックにご縁をいただいている私には、礼拝も讃美歌も初めての体験ばかりでしたが、その祈りの中でいただいた実りは豊かで、先生方のお説教やお祈りにイエスの実存を感じ、多くの慰めをいただきました。

これは、私にとって何よりも必要な励ましと希望の光でした。心より感謝いたします。本当に主に導かれて豊かな学びをいただきました。北九州信徒聖書学校が、これからも主の祝福のうちに、福音の種を豊かに蒔かれていかれますことをお祈り申し上げます。

（本科 27 期生・黒崎カトリック教会員）

法外な恵み

井上 千鈴

顧みて思うことは、ここは神の幕屋であったことです。語る者と聴く者が共に神の前に遡っていたことです。みな神を求め、神に顔を向けていたひと時でした。このよ

うな環境で学べたことは貴重な経験です。人間の学びには限界がありますが、先生方を用いられて語る神の熱情は無限です。目に見える文字と、耳に聞こえる声を通して、私たちが学んだことは、見えない神の愛のいのちでした。

旧約・新約聖書緒論の他に、ヘブライ語・ギリシャ語、礼拝学、教会音楽まで網羅したカリキュラムには充分満足いたしました。短い時間に広く深くと心を配って下さった先生方に感謝です。

礼拝の奨励者として、多くの先生方を招く下さったことも喜びでした。先日の礼拝で、N先生は原稿に覆いかぶさるような格好で「主イエスの弟子である小さな者に水を一杯でもくれた人に、神は法外な報酬を与えると、書いてある。」と話されました。「法外な報酬」と繰り返されました。私たちにも法外なみ恵みが与えられたと思います。

都会の片隅で、神と教会のために学び祈る私たちの存在がある。このことが神のみ業なのだと分かり実感します。2年前には想像もしなかったことです。「たぐいもなき宝さえ 捧ぐるには足らねど 貧しき身の歌と祈り 主は喜び受けたもう（讚美歌21・278）。本校に主の祝福を祈ります。

（本科27期生・日本キリスト教団行橋教会員）

学びを終えて

田畑 実

ついこの前に入学したと思っていたのに、は卒業することになりました。入学の時にも書きましたが、信仰生活55年です。その間仕事や家庭の事で聖書について十分な勉強ができませんでした。聖書は部分的に理解できても全般的に理解することはできませんでした。約60年間の仕事を終え、

家庭の事情も無くなりましたので、これからは充分にまた系統的に聖書が学べると思い入学しました。

それから2年間が経ちました。毎週の学びの時間を楽しみ期待しながら講義に出席しました。聖書の勉強は勿論ですが、その他のキリスト教に関する様々なことを学びました。教える先生方の個性ある講義で、学び方考え方があることを知り、勉強しなければならないことはたくさんあるなあと感じました。感謝しています。

旧約聖書の律法書、歴史書については当時の部族や異邦人の王国事情など教えられ、理解がかなり深められました。イザヤ・エレミヤ・エゼキエル書などの大預言書は難しいところがまだまだ多くあります。これからはなおも学んで生きたいと思っています。

現代の日本ばかりでなく世界的問題となっている倫理上の事柄即ち、自殺、安楽死、死刑、戦争人工中絶などについてキリスト教倫理として考える時間が少なかったことが残念です。これは当面の日本の教会の問題であると思います。我が国で新しく信仰を持つ人々が少ない。表面上の幸福に満足して本当の幸福を知らない。イエスを信じて救われることが少ないことです。先に救われて主の恵みに預かっている者が、救いの証人として積極的に立ち上がらなければならない。このためにも聖書学校で学んで得たものを活かしてお互いに祈って進みたいと思います。

（本科27期生

・日本キリスト教団北九州復興教会員）

編集後記

春3月、卒業式を迎える。

本科4名、研究科1名の方々が巣立つ。そして本校創立28年を終える。ご加禱とご支援に感謝を申し上げます。